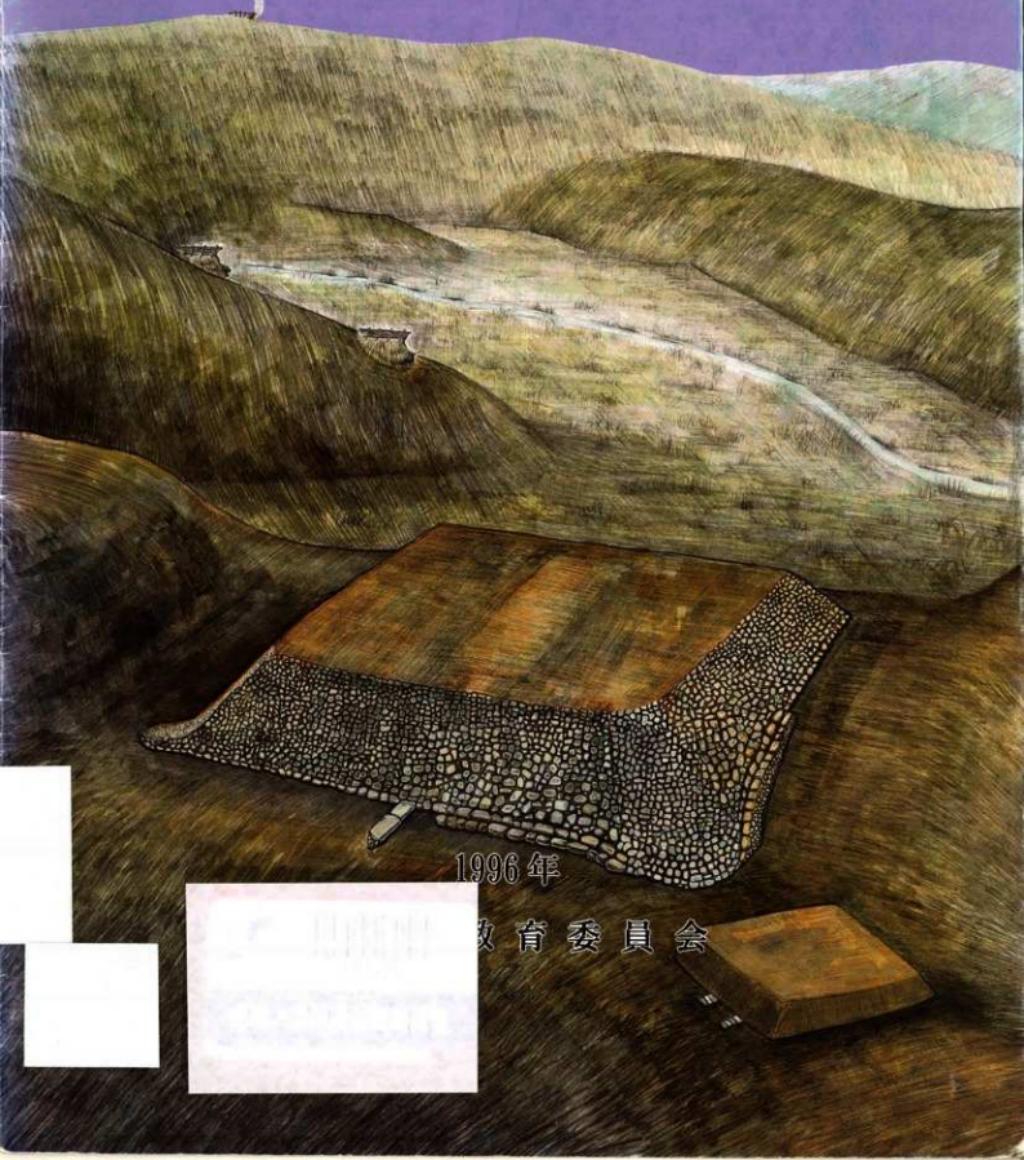


塙洋山1号墳が語る古代の出雲



1996年

教育委員会

1. 塩津山1号墳の発見と発掘調査



▲塩津山1号墳と安来平野・大山を望む

いるものは何か、発掘の成果をもとに謎に迫ってみましょう。

古墳のあらまし

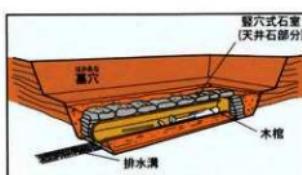


▲堅穴式石室のようす

塩津山1号墳は安来市荒島町・久白町を分ける丘陵上にあります。この丘陵では以前から古墳の存在が想定されており、字名から「塩津山古墳群」と呼んでいました。今回の調査で明らかになった1号墳は、南北25m、東西20mの長方形で高さ約2.5mの規模を持つ古墳時代前期（今から約1700年前）に造られた墓です。発掘調査では古墳の頂上に造られた埋葬施設や古墳の斜面を飾る貼り石の様子などが明らかになりました。

主の眠る場所～堅穴式石室～

盛り土によって平坦にされた墳頂部で6ヶ所の人を葬った跡（以下「埋葬施設」と呼ぶ）が確認されましたが、規模が最も大きくかつ複雑な構造であるのは第1埋葬施設です。6mを越える巨大な墓穴の内部に、「堅穴式石室」という施設を造っており、6基の埋葬のなかでも最も早く埋められ古墳築造の契機になった人物が葬られたと考えられます。



堅穴式石室の構造
棺を安置し、これを包み込むように石を積み上げた施設。石は薄い平らな板状のものが好んで用いられ、崩れないように積み上げるには高度な技術が必要でした。墓造りの先進地から技術者が派遣され各地の有力者の墓に採用されたようだ。鳥取県内では隣接する安来市造山1・3号墳や大成古墳など数例しか発見されていません。

発掘調査の経過



発掘始める前に地形測量を行います。どんな形の古墳が地表下に埋没しているかを想定できます。



平野に面した東側斜面は傾斜が急で、多くの貼り石は転落していました。

受け継がれた技術～貼り石～

塩津山1号墳を特徴付けるものとして、墳丘斜面を飾り、墳形を保護するための石垣状の施設があります。何重にも積み上げて造る石垣というより、斜面に石を貼り付けており、これを「貼り石」と呼びます。後で述べますが、貼り石は弥生時代後期以来この地域の首長クラスの墓造りには欠かすことのできないもので、今回の調査から古墳時代の初め頃にはまだ弥生時代の技術を元に墓造りが行われたことが分かりました。貼り石の他にも、古墳の裾に平坦なテラスを備えることなど、塩津山1号墳には伝統的な手法が多く用いられています。



▲北側斜面の貼り石のようす

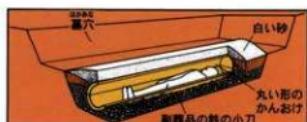
多種多様な埋葬～埋葬施設～

古墳は限られた人物のために造られるもので、1つの古墳には単数から2～3の埋葬が通常です。ここでは6基もの埋葬施設が発見され、棺の形や材料がそれぞれに異なります。こうした違いは、葬られた人物の生前の社会的地位や性別の違いを反映していると考えられます。



▲第3埋葬施設

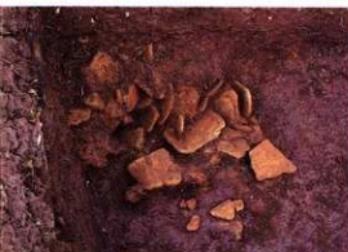
第3埋葬施設
2段に埋り込まれた穴の底に河原石を敷き詰め、丸太を繋り抜いた木棺（割竹形木棺）を安置しています。穴と木棺の間に河原の小石をぎっしり詰め込んでおり、木棺上には白砂がまかれています。同様な例は八束郡東出雲町寺床1号墳で発見されています。白砂の使用は仲仙寺9・10号墓や宮山4号墓など周辺の弥生墳丘墓でも認められています。



第5埋葬施設
高さ0.6mの壺形土器の口を高臺で塞いで棺に使用しています。



第6埋葬施設
長さ0.8mの土管のような土器を棺に使用しています。この土器は吉備（現在の岡山県）地方で墓上の祭器として発達した特殊な土器です。



第1埋葬施設の上からは儀式に使われた土器がまとめて出土しました。



第3埋葬施設の調査の様子。
木棺や遺体は朽ちて残っていませんでしたが副葬品の小刀が1本出土しました。



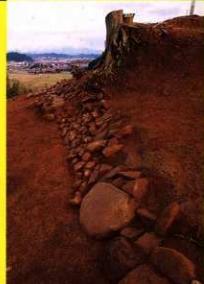
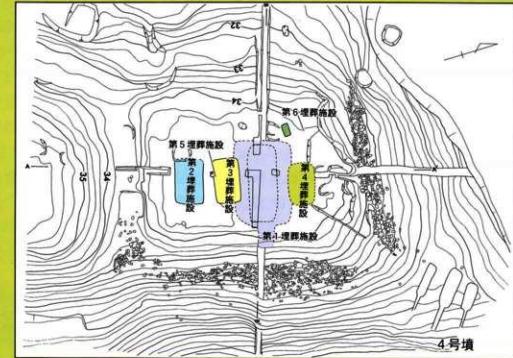
第5埋葬施設の土器棺は非常にろく壠さないように少しづつ丁寧に形を出していきます。土器の特徴をもとに古墳時代前期という年代を割り出すことができます。

塩津山1号墳ここがポイント

「弥生時代」と「古墳時代」、2つの時代の狭間に摇れる塩津山1号墳。弥生時代以来の地元の伝統か(○)、古墳時代の到来と共に新たに伝えられたものか(○)をキーポイントに塩津山1号墳を分析してみよう。

塩津山1号墳基礎データ

所在地：島根県安来市荒島町沢および久白町塩津
かたち：長方形
大きさ：25m×20m×高さ3m
造られた年代：古墳時代前期前半（西暦300年ごろ）
主な遺物：埋葬施設6基、埴丘斜面の貼り石、埴丘を区画する溝
主要な出土遺物：供えられた土器、棺として使われた土器、銅鏡、
鉄製小刀



塩津山4号墳
1号墳に並んで造られた古墳。もとは1号墳同様蓋石があったが、流失しており現形・貼り石などの様子は不明であった。規則正しく並んでいる埋葬施設は3基確認されているが、これらはそれぞれに形など構造が異なる。造られた時期は1号墳とほぼ同じ古墳時代前期（西暦300年頃）と思われる。



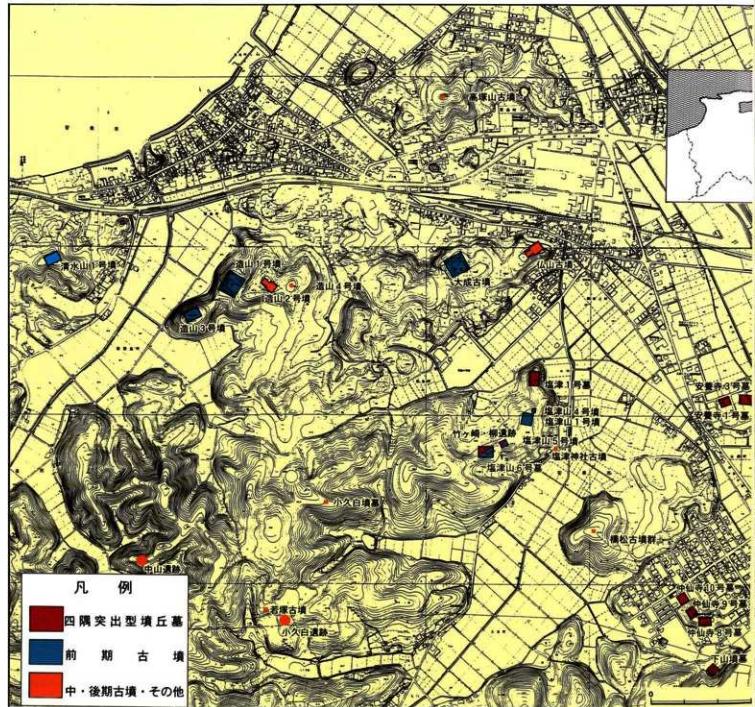
2. 荒島墳墓群

一 塩津山1号墳を取り巻く周辺の環境

塩津山1号墳の周辺には弥生時代の終わりごろから古墳時代を通して、この地方を治めていた首長達の墓がたくさん造られています。現在、これらの墓を総称して「荒島墳墓群」と呼んでいます。塩津山1号墳の重要性を確かめるためには、まず荒島墳墓群全体を見わたして、その中で塩津山1号墳を評価する必要があります。それでは、これから「荒島墳墓群」の実態をみていきましょう。

弥生時代後期には中海の海岸線が今よりも南に入り込んでいたと考えられます、その中海を眼下に見下ろすような丘陵上（現在の西赤江町）に四隅突出型墳丘墓という変わった形をした墓が造られます。昭和40年代に発掘調査された仲仙寺9号墓・10号墓や宮山4号墓・安養寺墳墓群は当時全国でも全く例の無い形の墳墓として話題を集めました。

そして、南側の仲仙寺・宮山の丘陵から久白川の流れる谷をへだてて今回発掘された塩津山1号墳



のある丘陵（久白町・荒島町）にも弥生時代後期から古墳時代初めの墳墓がたくさん造られています。中でも塩津山1号墳の北側に存在する四隅突出型墳丘墓の塩津1号墓は発掘調査は行われていませんが、一辺40mを越える大形の墳丘墓です。また、塩津山1号墳の南側にもさらに大形の墳墓が連なっています。

そして、塩津山のある丘陵から荒島小学校のある谷をへだてて、最も北側の中海に面する小高い丘（荒島町）には古墳時代の初めのころの島根県を代表する大形方墳である大成古墳・造山1号墳・3号墳など、規模の大きい前期古墳がところ狭しと並んでいます。

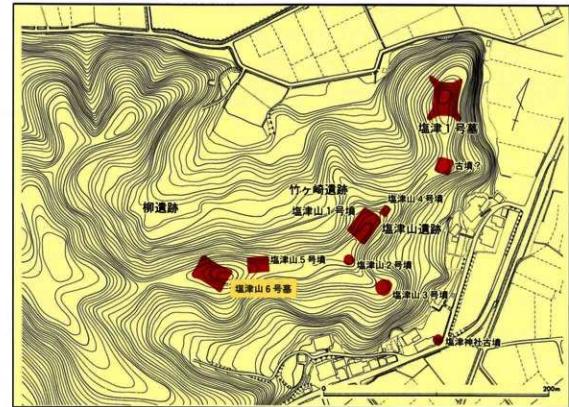
このように、弥生時代後期から古墳時代前期にこの地域を治めた首長達の墓が連なるこの地を見たすことによって塩津山1号墳の重要性がさらに確認できることでしょう。

それでは、これから荒島墳墓群の四隅突出型墳丘墓から前期古墳までの墳墓の移り変わりを少し詳しく紹介していきましょう。

荒島墳墓群 分布図

中海に臨む荒島墳墓群 ▶

塩津山1号墳とその周辺の道路



激動の弥生時代終わり頃の出雲のシンボル

小字みどりしゅつがたぶんきめうま
四隅突出型墳丘墓



宮山4号墓

奇妙な糸巻き形の墓

四角い壇状の丘の角が四方に奇妙に突き出た高まり。周りには石が貼りつめてあります。この写真は、安来三中横の丘の上にある宮山4号墓で、弥生時代の終わり頃（およそ1300年前）の墓です。

四隅突出型墳丘墓と呼ばれるこの宮山4号墓と同じような墓が、荒島墳墓群の中にはたくさんあります。神塚団地の中にある仲仙寺墳墓群、その近くの下山墳墓、荒島小学校の近くで塩津山1号墳のとなりの塩津1号墓や塩津山6号墓、そして今はなくなりましたが、宮山4号墓の北にあった安養寺墳墓群などです。地域の首長の墓と考えられるこれらの四隅突出型墳丘墓は、実は古代出雲を語る上で大きな謎をたくさんなげかけているのです。

四隅突出型墳丘墓の特徴



☆長方形の高まりの四隅がとびだしている。
四隅突出型墳丘墓の大部分は、高まりの形が長方形で、その角の部分が四方に突き出た形をしています。



☆頂上の平坦面に遺骸を葬る。
高まりの頂上部には、広い平坦面があり、そこに墓穴を掘って木の棺を納めます。棺を置いた後にしばしば砂をかけます。



☆斜面には石を貼りつけます。
ぐるりの斜面には石を貼ります。特に縦の石のおき方には特徴があり、二列の立てた石の並びの間に平坦な面を作っています。



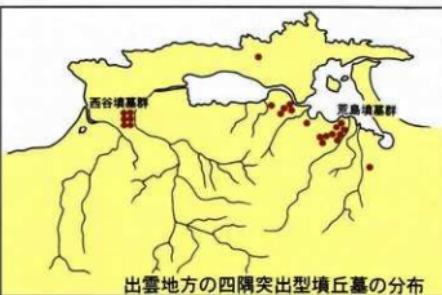
☆墓穴の上に土器をお供えします。
棺を納めて埋め戻した後、その上に器台や壺などの土器をお供えします。これらの土器の中にはお供えの品や飲食物が入れられていたのかもしれません。

出雲の二大勢力

さて弥生時代終わり頃の出雲地方全体を見渡してみましょう。同じような四隅突出型墳丘墓が平野部各地で作られていますが、特にこの荒島周辺と現在の出雲市の東部に集中して造られているのです。荒島墳墓群と西谷墳墓群です。どちらも40mを超える、当時としては全国的に見ても最大級の墓も含まれています。

どうやら当時、各地の首長が四隅突出型墳丘墓という共通の墓を作ることで出雲地方は一つにまとまっていたようです。この中心となっていたのが荒島と西谷の王だったと考えられます。

荒島周辺は当時の出雲の中心地の一つであり、荒島墳墓群に見られる四隅突出型墳丘墓は出雲で最も力を持った人たちの歴代の墓といって良いでしょう。



出雲地方の四隅突出型墳丘墓の分布

倭國大乱から邪馬台国の時代の出雲を語る「四隅」

出雲で四隅突出型墳丘墓が作られていた時代、日本全国はどういう時代だったのでしょうか。有名な中国の歴史書『魏志倭人伝』にはこう書かれています。

「其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること7、80年にして倭國亂れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為し、名づけて卑弥呼と曰う。」

卑弥呼が王位につく以前、日本中が争乱状態にあったことが記されていますが、出雲で巨大な四隅突出型墳丘墓が造られ始めるのはこの時代です。日本各地に戦乱を示す遺跡や遺物が検出され、特別な有力者の墓と考えられる遺跡も多く出てきています。群雄割拠のこの時代に、出雲は独特の形の墓をシンボルにして全国に名を轟かせていたと考えられます。

四隅突出型墳丘墓はこの時期、日本海に沿ってとなりの伯耆、因幡、そして遠く北陸地方にまで広がりを見せます。動乱期にあって、日本海側の列強が手を結んだのでしょうか。そして山を越えて吉備の大首長とも深いつながりを持っていたことが知られています。

やがて卑弥呼が立ち、邪馬台国の時代になると、出雲の東の境、安来では高い山の上に見張りのための集落が作られます。どうやら出雲は他のクニと緊張状態にあったことがうかがえます。そんななかで、出雲では、それでももちろん荒島でも四隅突出型墳丘墓が造られ続けています。既に以前のような広がりは見られませんが、「出雲ブランド」＝四隅突出型墳丘墓をかたくなに掲げていたようです。そしてヤマトによって墓の規格が決められた時代、「古墳時代」を迎えます。



墓の形からみる弥生時代後期の地域のつながり

荒島墳墓群の四隅突出型墳丘墓

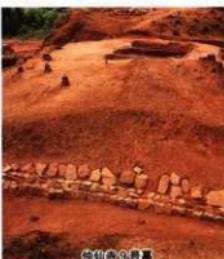
仲仙寺墳墓群

現在の神塚団地の南側に残されているのが仲仙寺墳墓群です。四隅突出型という名前を全国に轟かせた学史的な墳丘墓です。全部で三つの四隅突出型墳丘墓が知られ、そのうち8号墓、9号墓が保存されて国の史跡に指定されています。

9号墓は突出部を含めて長辺27m、短辺22.5mとかなり大形で、3つの道筋を葬った墓穴が見つかっています。となりの10号墓の中心の棺からは小形の菅玉が11個出土しています。弥生時代の墓で玉などの副葬品があるのは珍しいことです。



仲仙寺9号墓菅玉出土状況



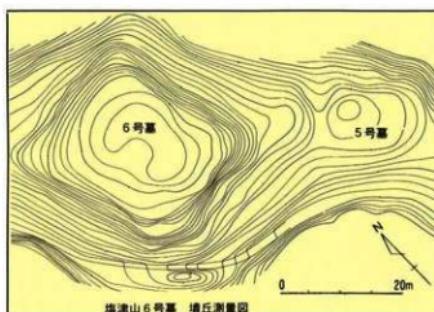
仲仙寺10号墓

宮山4号墓

安来三中の横の丘の上にあり、仲仙寺墳墓群の宮山支群として国の史跡に指定されています。四隅突出型墳丘墓としては最も新しい時期のもので、長さ68cmの大形の刀が出土しています。

塩津山6号墓

塩津山1号墳の南西側で今回新たに発見された大形の墳墓です。未発掘で詳しいことはわかりませんが、塩津1号墓に近い規模を持つ最大級の四隅突出型墳丘墓の可能性が高いものです。



塩津山6号墓 墳丘測量図

下山墳墓

仲仙寺墳墓群の南側の丘の上にあります。まだ発掘調査はされていませんが、長辺が30m近い四隅突出型墳丘墓と考えられます。



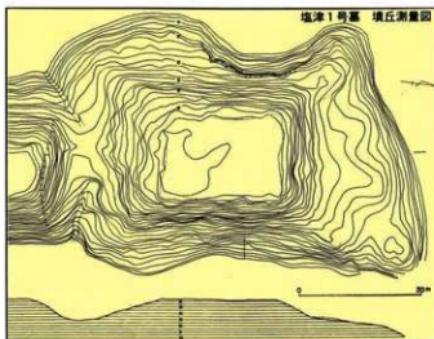
下山墳墓遠景

塩津1号墓

荒島小学校に程近い低い丘の上、塩津山1号墳のとなりにあるのが塩津1号墓です。まだ発掘調査されていないので詳しいことはわかりませんが、突出部を含めると長辺が40mにおよぶ荒島墳墓群最大の四隅突出型墳丘墓です。出雲地方でも、出雲市西谷3号墓と肩を並べ、全国的に見ても最大級の弥生墳丘墓といえます。県の指定史跡です。



空から見た塩津1号墓



塩津1号墓 墳丘測量図

「四隅」の首長の後継者たち

—古墳時代の荒島—

古墳とは？

今から約1700年前、それまで四隅突き出型墳丘墓がたくさんつくられていた丘陵の隣の山に四角い形をした大形の墓がいくつも築かれはじめます。荒島地区における古墳時代の幕開けです。

新たに造られはじめた墓は、角こそとび出でていませんが、それまでの「四隅」

と同じ方形の墓です。しかしそれまでの「四隅」とは大きな違いが見られます。

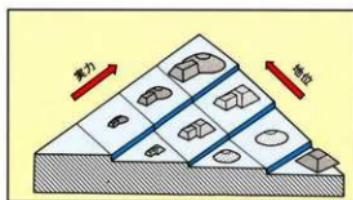
弥生時代の最終末、今の奈良県を中心として全国規模で新しい墓造りへの動きが始まっています。新たにつくられはじめた首長の墓は、前方後円形という新たな形を採用し、埋葬施設に竪穴式石室をもち、鏡や鉄の武器等共通の副葬品をもっています。それまでの「四隅」のような弥生時代の墓は、例えば山陰地方など地域の中では同じ墓造りをしていても、別の地域では全く違った墓を造っていたというように、全国的な共通性はまだみられませんでした。

共通のマニュアルに従って墓を造り、そこで共通の埋葬の儀式を行うことによって、ヤマトを中心として全国的なまとまりが日本史上初めて形成された時代、それが古墳時代なのです。

古墳の出現は何を意味するのか？

古墳のような大きな墓に葬られた人々は、当然その地域の首長であったと考えれます。こうした全国各地の首長が、ヤマトの大王にならった共通の墓造りを一齊に始めることには極めて重要な意味があるのです。現在では、古墳の始まりはヤマトを中心に全国的規模で政治的なまとまりができるようになったことを物語るものと考えられています。

一口に古墳といっても様々な大きさや形のものがあります。これらは一般にヤマトの大王と各地の首長との関係の深さや力関係で決められていましたといわれています。古墳はただの墓ではなく、そこに葬られた人の地位や実力を示す当時のシンボルだったのです。



前方後円墳体制模式図

一般に古墳の形はヤマト政権との関係による地位や身分を示し、古墳の大きさは葬られた首長の実力を示すものと考えられています。

全国最大級の大形方墳集中地帯 一荒島一



現在のJR荒島駅の裏にひろがる丘陵一帯には古墳時代前期の大形古墳が密集しています。この時代にこれだけの大形古墳が集中している地域は県内ではこの荒島の地しかありません。このように荒島丘陵一帯は、弥生時代から古墳時代にかけての、まさに出雲の「王陵の丘」だったのです。これらの大形古墳は、四隅突出型埴丘墓を営んだ弥生時代の荒島の大首長の後継者たちの墓と考えられています。このように、弥生時代の首長の子孫の墓がそのまま古墳時代にも連続して認められる地図は全国的にみても極めてまれです。

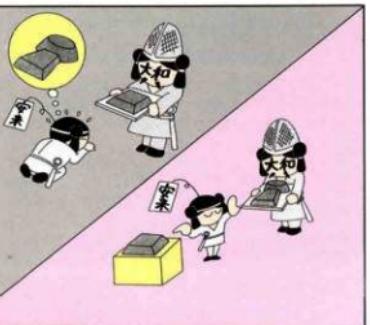
この荒島の古墳群にはもう一つ特徴があります。それはこれら古墳時代前期の大形古墳すべてが四角い形をした方墳であることです。他の地域では、その地域最大の古墳は前方後円墳や前方後方墳で占められており、方墳がその地域最大の古墳であるところは出雲しかありません。古墳時代前期に限っていえば、全国最大の方墳は荒島の造山1号墳であり、そのほか大成古墳や造山3号墳が全国の中でも上位に位置しています。

荒島の大形方墳は何を意味するのか？

では、なぜ当時出雲最大の首長の墓は方墳だったのか？ この謎について少し考えてみましょう。先に、古墳はそこに葬られた首長の地位や身分を示すものであったことを説明しました。特に墳形については、トップが前方後円墳でその次が前方後方墳、その下に円墳や方墳が位置するとの説が一般的です。この説に従うと、荒島の首長は前方後円墳を作れる十分な力があったにもかかわらず、ヤマトに下位のランクである方墳しか築造を認めてもらえなかったことになり、当時のヤマト政権の強い規制を受けていたものと考えることができます。

その一方で次のような見方もできます。つまり、それまで四隅をつくり続けてきた荒島の首長はヤマトから鏡をもらう等新しい墓制を取り入れる一方で、古墳の形についてはヤマトの大王の命に従わず、それまでの四隅の伝統を引き継ぐ四角い形の墓をつくり続けたと……。

どちらの説が正しいのか、または別の考え方がありそれが正しいのか、現状ではわかりません。いずれにせよ、どの説をとるかで全く違った古代出雲の歴史像を描くことになります。そして、この謎を解く最大の鍵は、弥生時代から古墳時代へと歴史が転換する、まさにその狭間の激動の時代に営まれた塩津山1号墳に秘められているといつてよいでしょう。塩津山1号墳は古墳時代の出雲の実像を解く最大の鍵をもっているだけでなく、全国的な古墳時代という時代そのものを考える上で極めて重要な位置を占めているのです。



荒島墳墓群の前期古墳

古代出雲王陵の丘 一造山古墳群

造山古墳群は4基からなる古墳群で、このうち最大の1号墳が国指定史跡、3号墳が県指定史跡となっています。近年2号墳と4号墳の発掘調査が行われ、現在はこの2つの古墳を中心に「古代出雲王陵の丘」として公園整備が行われています。



造山古墳群遠景 (右の丘陵が3号墳・中央が1号墳)



(安来市教育委員会提供)

造山1号墳

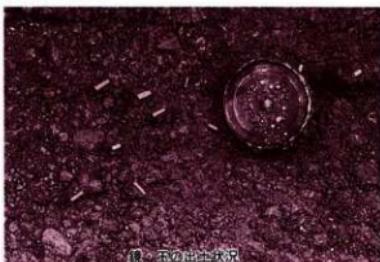
造山1号墳は1辺約60mの古墳時代前期では全国最大級の方墳で国の史跡に指定されています。墳頂部には竪穴式石室が2基あり、三角縁神獸鏡や中国製の素環頭大刀など全国的にみても一級の資料が出土しました。4世紀中頃の古墳。



造山1号墳竪穴式石室の内部

造山3号墳

造山3号墳は1辺約40mの方墳で県の史跡に指定されています。昭和40年に行われた発掘調査で、竪穴式石室内からやや小振りの中国鏡と碧玉製の首飾りなどが出土しました。4世紀後半の古墳。



鏡・玉の出土状況



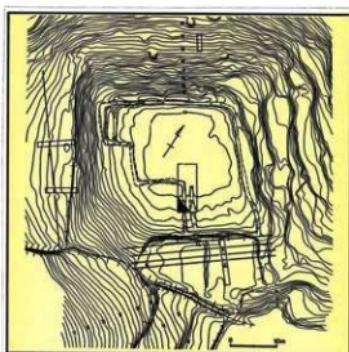
斜線縁神獸鏡



碧玉製管玉・ガラス玉

大成古墳

大成古墳は東西58mの規模をはかる大形の方墳。明治年間に竪穴式石室が発見され、卑弥呼の鏡といわれる三角縁神獸鏡や中国製の素環頭大刀など全国的にみても一級の資料が出土しました。近年再び発掘調査が行われています。4世紀前半の古墳。



大成古墳 墳丘測量図

(ベースマップは本村豪東ほか)

〔既述前期古墳資料の総合的再検討〕(1992による)
(東京国立博物館・島根大学・安来市教育委員会提供)

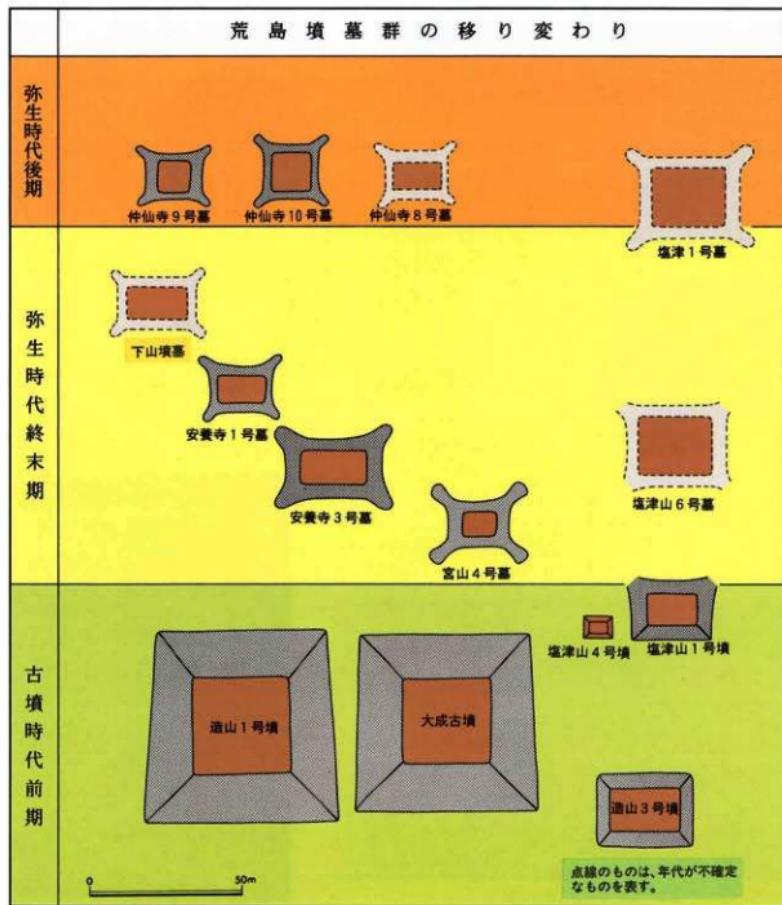
3. まとめ

今回の塩津山1号墳の発掘調査によって島根県のみならず日本全体の古墳時代のはじまりを語るための貴重な発見がたくさんありました。

それにより、荒島墳墓群が弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓から時代の狭間にある塩津山1号墳をへて、大成古墳や造山1号墳などの大形方墳に引き継がれていく実態がよりいっそう明らかになりました。そして、地域社会が移り変わって行く様子が、全国の中でも驚くほどよく観察できる典型的な例として、今まで以上に「荒島墳墓群」の評価が高くなりました。

それでは、塩津山1号墳がどのような特徴をもっているのかを、簡単にまとめてみましょう。

まず、古墳を形づくる墳丘の斜面は葺石と呼ばれる石で飾られています。これは弥生時代の終わりごろの四隅突出型墳丘墓の手法である「貼り石」の技法が使われています。それに加え、なにより安来平野に面した北東と南東のコーナー部分が全盛期の四隅突出型墳丘墓ほどではないにしても張り出し気味に造られていることが大きな特徴です。



年 代	時 代	くらしやできごと	荒島周辺の主なできごと
200 年	弥 生 時 代	◎各地で争い事がひんぱんになる	◎仲仙寺墳墓群がつくられる
239 年	時 代	◎邪馬台国の女王・卑弥呼が魏に使いを送る	◎宮山4号墓・安養寺墳墓群がつくられる ◎竹ヶ崎・柳遺跡で村が発見される
300 年		◎近畿地方を中心に全国的に古墳がつくられるはじめる	◎このころ、塩津山1号墳がつくられる ◎大成古墳・造山1号墳がつくられる ◎造山3号墳がつくられる
430 年	古 墓 時 代	◎朝鮮半島から須恵器を焼く技術が伝わる	◎宮山1号墳・清水山1号墳がつくられる
538 年		◎朝鮮半島から仏教が伝わる	
593 年	飛 島 時 代	◎聖德太子が摄政になる	◎塩津神社古墳・若塚古墳がつくられる
645 年		◎大化の改新	
710 年	奈 良 時 代	◎平城京に都が遷る	◎中山道跡や小久白道跡で火葬墓がつくられる ◎出雲國風土記が編纂される
733 年		◎国分寺の建立が始まる	
741 年		◎東大寺の大仏完成	◎出雲国分寺が建てられる
752 年			

塩津山1号墳周辺のできごと

証拠といえるでしょう。

そして、埋葬施設に再利用されていた円筒形の焼き物は、現在の岡山県で弥生時代後期にお墓で使われていた神聖な壺を置く台として発展した「特殊器台」に影響されて、山陰地方で地元の流儀に合うように作り出されたものです。このような特殊な円筒形の焼き物は、全国的にみても最も古いといわれる古墳などでわずかに見つかっているにすぎません。

このように、塩津山1号墳そのものが弥生時代の「四隅突出型墳丘墓」という地域の伝統を大きく残しながらも、近畿地方を中心として全国に普及した「古墳」として造られているのです。

島根県で最古クラスの古墳に位置付けられる塩津山1号墳は、この地域の歴史を解明していく上ではもちろん、日本列島が一つの国としてはまとまっていく過程を考えるうえでも、非常に重要な古墳であるといえるでしょう。

この古墳の主人を葬った場所（第1埋葬施設）は、近畿地方を中心に全国的に広がった、その当時最新式の「豊穴式石室」という施設です。これは長い木棺を納めるために石をたくさん積み上げて、細長い石の部屋のようにしたもので

してその一方で、その横には山陽・近畿地方に起源を持つ、竹を割ったように丸太を削りぬいて作った木棺を納めていた第3埋葬施設があります。しかし、この木棺のまわりには四隅突出型墳丘墓以来の伝統である白砂が大量に使われています。これは外来の新しい方法と地元の伝統的な習慣をかけあわせて墓を造っていたことを示しています。

さらに、たくさんの土器を墓に供えていることは、まさに弥生時代後期以来の山陰地方の伝統にのっとっています。また、一つの古墳の上にたくさんの人を葬るという習慣も弥生時代の「家族墓」という伝統を残していることの

荒島墳墓群を未来に引き継ぐために

今までみてきたように、安来市荒島丘陵一帯は弥生時代から古墳時代にかけて、島根県を代表する貴重な墳丘墓や古墳が集まっていることが明らかになりました。これらの墳墓群を私達は後世の人達に引き継ぐために保存していかなければならないでしょう。

ところでこの荒島墳墓群について、私たちが知り得たことは、そんなに多くありません。墳墓群の広がり、時期、規模、築造方法などをもっと詳細に明らかにし、学術的に検討する必要があります。このことは、古代の島根を明らかにするだけでなく、将来の活用のための資料をつくることになるのです。私たちは明らかになった歴史的事実をさらに付け加えて次の世代に伝えていかなければならぬと思います。こうした努力の積み重ねによって島根県の歴史は、より一層鮮明になることでしょう。

さらに明らかになった荒島墳墓群の様子は、整備公開されることで多くの人に伝えることができます。本当の意味で荒島墳墓群を次の世代に伝えるためには、遺跡を公有化し、散策路を作り、墳墓が作られた当時の姿に復元するなどの整備をしたり、資料館を作るなどの努力も必要です。もっと多くの人が荒島墳墓群を知り、理解し、足を運ぶようになればすばらしいことでしょう。そうなれば荒島墳墓群は、地域の共有の財産として今以上に光輝くことになるはずです。

そして、こうした荒島の墳墓群を次の世代に伝える活動が地域づくりの基本になればすばらしいことだと思います。



塩津山1号墳 現地説明会風景

1996年2月 発行

発行 島根県教育委員会

印刷 島根印刷株式会社